

# 小学校の美術教育に関する考察

## —中国画と日本画の違いを中心に—

BU Mengye

### Abstract

This study centres on the traditional culture of the two countries, Chinese painting and Japanese painting, and the proportion of the textbook as an entry point. The 2022 edition of China's Compulsory Art Curriculum Standards and Japan's School Education Law both include an emphasis on traditional culture. This shows the importance of traditional culture in China and Japan.

Firstly, art education trends regarding Chinese and Japanese paintings in Chinese and Japanese art curriculum standards and study guides, as well as textbooks, are discussed. Secondly, a survey was conducted in Chinese and Japanese primary schools to summarise the results of the survey on children's awareness of learning Chinese and Japanese painting, to understand the actual situation of Chinese and Japanese painting education nowadays, and to analyse the differences between the concepts of art education in China and Japan. Finally, solutions are proposed based on the problematic points of Japanese painting education, and the necessity of raising the awareness of elementary school students to learn Japanese painting is examined while standing on the educational scene in Japan.

キーワード……日本画 中国画 美術教育 伝統文化

### はじめに

本稿は、中国と日本の美術教育を中国画と日本画に対する意識の違いから考察する。特に、両国の図画工作の教科書の内容と児童の意識の違いを中心に論じていく。中国では、小学校の教科書でも課外活動でも、また学外の美術塾でも、学習内容として中国画が多く取り入れられており、造形遊びなどの活動から自然に水墨画に対する意識を深めることができるように設計されている。一方、日本では、図画工作の教科書の中には日本画に関する内容は少なく、課外活動でも日本画に触れる機会はほとんどない。また、児童画展でも、中国では中国画に関する展示が多いのに対して、日本では日本画の展示はほとんど見られない。

このような現状を踏まえて、本稿では中国と日本の小学校の教科書を比較し、それぞれの国でそのような違いが生じた理由や学習指導要領の変遷について明らかにするとともに、これから求められる美術教育、とりわけ日本独自の文化である日本画を小学校美術教育により積極的に取り入れるべきであることを提言したい。

研究方法として、まず、中国と日本の小学校の教科書における中国画と日本画に関する学習内容を分析する。次に、中国の小学校と日本の小学校 6 年生に対するアンケート調査の結果を基に中国画と日本画に対する意識について考察する。

## 1 芸術課程標準と学習指導要領

中国と日本の小学校の教科書を比較するにあたり、それぞれの教科書作成の基になる中国の芸術課程標準と日本の学習指導要領、それぞれの目標について確認しておく。

中国の芸術課程標準は、芸術課程の授業内容や目標を設定する、日本の学習指導要領にあたるものである。中国の芸術課程標準は、「中国の深い文化と党の百年にわたる奮闘の大きな成果を感じ、理解し、中国の優れた伝統文化、革命文化、社会主義の先進文化を伝承し、発揚し、文化の自信を確固たるものにし、中華民族共同体意識を確固たるものにする」<sup>1)</sup>ことを目指している。

日本の学習指導要領は、学校教育法の義務教育の第二十一条の三「我が国と郷土の現状と歴史について、正しい理解に導き、伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛する態度を養うとともに、進んで外国の文化の理解を通じて、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養うこと」<sup>2)</sup>を明示している。教育基本法の教育の目標は、「伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛するとともに、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養うこと」<sup>3)</sup>と記されている。学習指導要領の教育内容の主な改善事項には、「言語能力の確実な育成、理数教育の充実、伝統や文化に関する教育の充実、体験活動の充実、外国語教育の充実などについて総則や各教科等において、その特質に応じて内容やその取扱いの充実を図った」<sup>4)</sup>とある。

日中の指導要領はいずれも伝統文化の尊重を含んでいる。中国の小学校教科書では中国画が伝統文化として多く取り扱われ、児童に小さい頃から中国画を学ぶことを意識させようとする。また、学校の授業以外の部活や校外の美術塾などでも中国画の授業が行われている。このような背景から、児童は中国画に関する基本的な知識を持っている。一方、日本では、指導要領に伝統文化の尊重が示されているにもかかわらず、実際の小学校教科書には日本画に関する内容は少ない。また、美術塾などでも日本画はあまり取り扱われない。このような背景から、児童は日本画そのものに対する意識が低いと考えられる。

## 2 日中の教科書における中国画と日本画の比較と分析

### 2-1 教科書内容の比較

中国の美術の教科書は、中国画に関する様々な内容を含んでいる。3 年生下冊 (下巻) の「水墨ゲーム」で児童は初めて中国画の作品に触れ、画家たちの作品を鑑賞し、墨の技法を使って

自分の作品を描く。この活動の目的は、児童が初めて中国画に触れ、墨に対する基本的な認識と墨の楽しさを体得することである。5年生上冊には、中国画に関する「鳥のさえずりに花の香り」と「詩情画意」という授業がある。「鳥のさえずりに花の香り」では、児童は筆と墨の楽しさを体験し、自分で中国画顔料と墨で画仙紙に絵を描く。そして、児童は中国画の基本的な道具、毛筆、墨、中国画顔料と画用紙に関する知識を理解する。また、「詩情画意」では中国の古詩と中国画の関係を分析し、児童は古詩を絵で表現する。5年生下冊の「写意：野菜や果物」は画仙紙に野菜や果物の絵を描く内容で、中国画に関する知識・技能教育である。「写意：動物」では前の授業で学んだ技法を用いて動物を表現する。「松の木を描く」では、児童は松を墨で描く技法を学び、画仙紙に松を描く。6年生上冊の「山山水水」では、児童が山水画の描き方について学び、山や石の技法を用いて水墨や線で山水の景色を描く。「彩墨家園」では墨と中国画顔料を用いて故郷を表現する。また、画家の作品を鑑賞し、木を描く技法や墨の濃淡について勉強する。「中国画と油絵鑑賞」では、中国画の内容と表装について簡単に説明し、児童に中国画に興味を持たせる。6年生下冊の「扇面画」では、中国画の形式が多様であることや扇子に絵を描くことができることを知り、扇面の形状に応じて山水や花鳥を描くことを学ぶ。「工筆花卉」では工筆画の技法や材料を認識する。絵の具を試しながら、児童は工筆花卉を模写する。

一方、日本の美術の教科書では、5・6年生の下巻の二つの単元が日本画に関する内容を含んでいる。一つは「墨から感じる形や色」で、水墨の楽しさを体験したり墨の濃淡の変化を体験したりして、墨を使って自分の気持ちを表現する。もう一つは「味わってみよう、日本の美術」で、絵巻物と掛け軸、屏風について簡単に説明し、外国人に日本の文化を紹介する。

以上の比較は次のようにまとめられる。中国の美術の教科書は、中国画に関して簡単なものから複雑なものまで幅広い内容を含む。まず水墨の楽しさを体験し、その後、写意：花鳥画—写意：山水画—写意：野菜や果物—写意：動物—写意：風景—写意：山水画—扇面写意画—工筆花卉画を学ぶ。このような内容によって中国画の基本的な知識を身につけ、児童のうちに中国画に対する基本的な認識を育む。同時に、中国画に対する興味育成と技能知識の育成も目指している。それに対して日本の美術の教科書は日本画に関する内容は二つしかなく、その内容は水墨の活用と日本の美術作品の鑑賞である。日本画の画材や基礎知識に関する学びは少ない。小学校では日本画が重視されていないことがわかる。

2-2 教科書の内容分析

図 1. 墨の表現に関する教科書内容<sup>5)</sup>

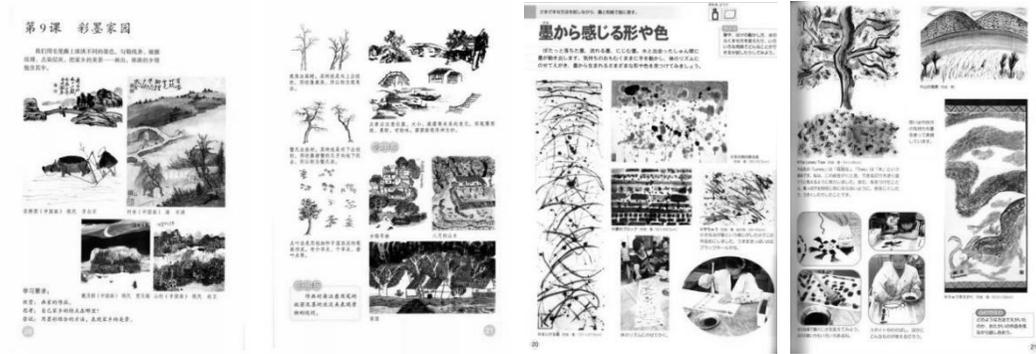


表 1. 日中の教科書に見られる墨の表現の比較<sup>6)</sup>

	中国「小学校の美術教科書」 人民教育出版社	日本「図画工作」 日本文教出版
題材名	彩墨家園 (6年生・上冊)	墨から感じる形や色 (5・6年生・下)
※概要	墨と色で故郷を表現する。	墨で形と色を表現する。
くふう	1.画家の作品を鑑賞する。 2.自分の故郷の特徴はなんですか？ 3.墨と彩を組み合わせて、故郷の美しさを表現する。	1.いろいろな用具でどんなことができるか？ 2.思い出や自分の気持ちも墨を使って表現しています。
※概要	鑑賞し、墨の技法を学習し、表現する。	いろいろ試して墨で気持ちを表現する。
ふりかえり	絵を描く時は筆の疎密と墨の濃淡に注意して景色の空気感を表現する。	どのような方法でえがいたのか、おたがいの作品を見ながら話し合おう。
※概要	技法の活用。	墨の技法について話し合う。
写真の分析	画家の作品と木の描き方の写真が掲示されている。技能を学習することが狙いである。	児童が描いた作品の写真が掲示されている。児童は実践的に自分の気持ちを絵で表現する。

日中の美術教科書の比較は図 1 及び表 1 にまとめられる。中国の教科書には有名な画家の中国画作品が掲載されており、それを児童に鑑賞させることで中国画に関する一定の知識を得る。まず技法を学び、それから絵を描く。この教科書は順序だてて構成されており、児童は中国画

を理解しやすいだろう。一方、日本の教科書には児童の水墨作品が掲載されており、つまり児童は児童の作品を鑑賞する。技法については、様々な描き方を試し、互いに交流しながら水墨の技法で自分の感情を表現する。日中ともに墨について学ぶが、中国では教師が児童に教えることを重視し、日本では自分で探求して学ぶことを重視している。順序だてて中国画を学習できるため。日本の教育方法は児童の想像力や手を動かす力を発達させるが、自分で知識を得ることは難しく、美術作品への興味を失う可能性がある。中国の6年生の教科書では、墨にはじまり顔料の使用、さらには構図や技法までも学習し、児童は中国画の作品を自分で完成させることができる。日本の6年生の教科書では、墨の濃淡などを学ぶにとどまり、日本画の岩絵具に関する知識や金属材料の活用については触れず、児童が日本画の作品を完成させることはできない。

図 2. 鑑賞内容<sup>7)</sup>

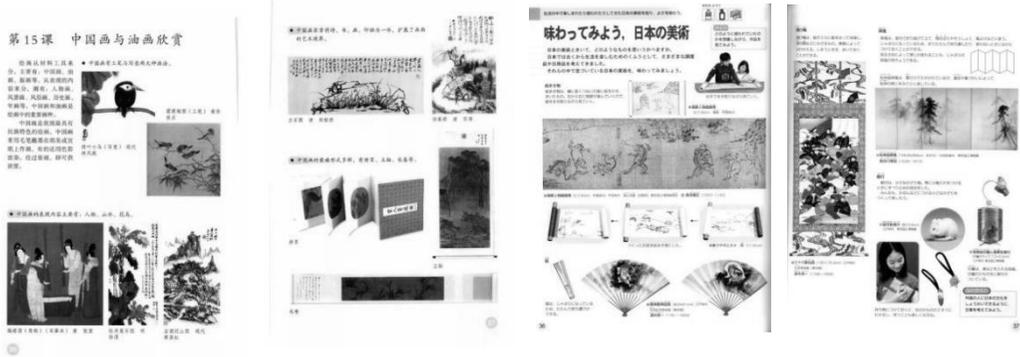


表 2. 日中の教科書に見られる鑑賞内容の比較<sup>8)</sup>

	中国「小学校の美術教科書」 人民教育出版社	日本「図画工作」 日本文教出版
題材名	中国画と油絵鑑賞（6年生・上冊）	味わってみよう、日本の美術 （5・6年生・下）
※概要	（中国画家の作品を鑑賞する）	（日本の美術作品を鑑賞する）
導入文	中国画は中国の最も民族的特色がある絵画である。中国画は絹本や紙に絵を描く。彩色され、表装されているものもある。	日本の美術ときいて、どのようなものを思いうかべますか。日本では古くから生活を楽しむためのくふうとして、様々な調度品や日用品を考えしてきました。それらの中で息づいて

<p>※概要</p>	<p>中国の民族文化と中国画の基礎知識を理解する。</p>	<p>いる日本の美術を、味わってみましょう。 日本の美術を体験する。</p>
<p>ふりかえり</p>	<p>1.中国画の作品の写真と資料を収集する。 2.中国画の特徴を勉強する。 3.自分の好きな中国画を選んで、考え方について話す。</p>	<p>外国の人に日本の文化をしょうかいできるように、文章を考えてみよう。</p>
<p>※概要</p>	<p>中国画の特徴を勉強し、中国画作品を鑑賞することができる。</p>	<p>日本の美術について簡単に勉強する。</p>

観賞内容の比較は図2及び表2にまとめられる。まず、題材名について、中国の題材名は授業の内容をまとめたものであり、日本の題材名は児童の好奇心を刺激しやすい。内容から言えば、中国の教育内容は技能と知識に関する学習を重視し、中国文化への理解力注意力を育成しようとする。中国の1コマの授業時間は45分である。例えば、教師が約20分で内容を教えて児童は中国画の知識を学び、その後約20分間グループで交流しながら中国画の作品を鑑賞し、好きな理由と嫌いな理由を述べ合う。一方日本では、授業の内容は日本の美術を鑑賞するだけで、日本画の作品にどのような画材が使われているのか、鑑賞の際の構図や特徴は学んでいない。つまり、技能と知識の学習を重視していない。ただし、児童の発想力や想像力を育てることを重視する。体験を通じて児童の好奇心を喚起する。例えば、授業のふりかえりには「外国の人に日本の文化をしょうかいできるように、文章を考えてみよう」<sup>9)</sup>という指示がある。この活動によって児童の学習意欲をかき立て、自分で知識を学ぶことができると考えられている。

以上をまとめると、中国では技能や知識の習得が重視されているのに対し、日本では発想力や想像力の開発が重視されている。どちらの教育が優れているかは議論の余地がある。中国は人口が多く、段階ごとにテストが行われる。「応試教育」という言葉があるように、全員がテストのために勉強するので、授業は知識を重視した教育観念の影響を受ける。児童の想像力の育成や楽しい学習などの教育観念を提唱した人もいるが、実際は困難に直面することが多い。それに対して日本の教育は比較的自由で楽しいもので、児童の想像力を発達させることを目指す。しかし、このような教育が優れていると言えるだろうか。中国の児童は中国画について知っている。日本の児童は創造力の発達を育成されるが、日本画については知らない。

### 3 小学校の美術教育

#### 3-1 日中の小学校の違い

筆者の経験では、中国の小学校教員は、採用試験に合格したのちに学校を着任すると、ずっと同じ学校で働き、転勤する必要がないのが一般的である。日本の小学校の教員は3～5年ごとに必ず勤務先の学校を異動する。教科書は、中国の美術教科書は国家課程、地方課程、校本課程の三つに分かれている。国家課程は国の教育機関が定めた統一課程である。地方課程は、国が定めた教育段階のうち、省の教育部門がその地域の政治経済や文化などの発展に応じて開発するものである。校本課程は児童の個性を伸ばすことを目的とし、学校が自ら考えて実施する。校本課程開発の主体は教師である。また、中国の教師は教科書に合わせて美術の授業を進めるのが一般的であるのに対し、日本の教師は学習指導要領（図画工作）に照らし合わせて自分の好みに応じて授業を展開することが可能で、自由度が高い。

筆者が日本で参観した小学校の実態を見ると、日本の児童は屋内に入る前に玄関（昇降口）で靴を履き替えるため、屋内は清潔である。クラスの人数は中国より少なく、授業中に机を移動できる。授業中にタブレットを使うこともある。教師の職場環境としても一つの学校でひとつの職員室を共有しており、互いに交流するのに便利だと思われる。中国の場合、屋内に入る前に児童は履物を替える必要はない。クラスの人数は日本より多く、50人以上が一般的である。児童がタブレットを学校に持って行くとゲームをする恐れがあるため、タブレットを持つていくことは禁止されている。また、教師の職場環境としても人数が多いため、科目によって職員室が異なり、交流の機会は少ないと思われる。

#### 3-2 中国画教育の現状

本稿では、児童の意識把握を目的として、日中の児童に対して中国画と日本画における学習の現状についてアンケートを行った。中国の調査対象は三つの学校である。遼寧省瀋陽市白塔小学校 6 年生 112 人と遼寧省錦州市解放小学校 6 年生 31 人で、この二つの学校は都市部の一般的な小学校である。加えて、河北省保定市南雅握小学校 6 年生 25 人で、これは地方の農村部にある小学校で、美術教師は不在、美術の授業はないという現状がある。また、この地域は生活条件が厳しく、美術教師の数も非常に少ない。日本の調査対象校は、新潟市立西内野小学校の 6 年生 121 人とし、これは一般的な小学校である。

調査結果から、以下の点が指摘できる（次頁表 3 参照）。まず、中国の小学校では中国画は美術教育の中で重要な役割を占めており、6 年生では中国画について知っている児童が多い。教師は教科書に沿って中国画に関する授業を行う。授業を通じて中国画を知る児童が比較的多い。自由記述では、農村部の小学校では次のような回答が得られた。「中国画をもっと勉強したい、伝承したいです」「中国画はとても素晴らしく、長い年月の歴史があります」「興味深

い」「中国画を勉強したいです」「中国画は我が国の伝統文化であり、私たちは中国画を理解し、学ぶ責任があります」。都市部の二つの小学校でも以下のような回答が見られた。「中国画は我が国の伝統文化の一つで、中国画はとても綺麗です」「中国画を勉強したい、リラックスできますし、楽しくできます」「中国画が筆と墨だけでこんなに美しい作品を描けるのは素晴らしいと思います」「私は中国画がとても好きで、中国画が伝承していくことができることを望んで、みんなに中国画を好きになって欲しいです」「私は中国画がとても好きで、とてもきれいです。中国画を勉強したいです」「中国画をちゃんと勉強し、児童画展を参加したいです」。

農村部は教育環境が整っておらず、保護者や教師も美術を学ぶことへの意識が低い。中国画の授業は受けておらず、画具や書籍なども手に入りにくい状況にもかかわらず、児童は伝統文化である中国画を学ぶことへの意識が比較的高い。また、都市部の児童は、「中国画の授業を受けたい」と回答した割合は高いとは言えないが、一方で「(中国画の授業を受けたいとの希望が)普通、特にはない」の割合が高い。その理由は、中国画への興味・関心は高いものの、受講人数が多いため絵を描く場所が必然的に狭くなるので、受講希望が低いと考えられる。ただし、「(中国画の授業を)受けたくない」と回答した割合は低いので、中国画についてある程度知った上で中国画を継承していきたいと望む割合が高い。

表 3. 中国と日本の小学校の調査結果<sup>10)</sup>

中国	人数	河北省保定市南雅握小学校 25 人	遼寧省錦州市解放小学校 31 人	遼寧省瀋陽市白塔小学校 112 人	日本	人数	新潟市立西内野小学校 6 年生 121 人
	割合					割合	
中国画のことを詳しく知っている	人数	2 人	7 人	23 人	日本画のことを詳しく知っている	人数	0 人
	割合	8%	22%	20%		割合	0%
少しだけ知っている	人数	7 人	24 人	81 人	少しだけ知っている	人数	18 人
	割合	28%	77%	72%		割合	14.8%
知らない	人数	13 人	0 人	0 人	知らない	人数	103 人
	割合	52%	0%	0%		割合	85.1%
中国画につ	人数	0 人	28 人	98 人	日本画につい	人数	9 人

いて習った ことはある	割合	0%	90%	87.5%	て習ったこと はある	割合	7.4%
中国画につ いて習った ことはない	人数	25人	3人	14人	日本画につい て習ったこと はない	人数	112人
	割合	100%	9.6%	12.5%		割合	92.6%
中国画につ いての授業 を受けたい	人数	17人	15人	27人	日本画につい ての授業を受 けたい	人数	43人
	割合	68%	48%	24%		割合	35.5%
中国画につ いての授業 を受けたく ない	人数	2人	3人	6人	日本画につい ての授業を受 けたくない	人数	50人
	割合	8%	10%	5%		割合	41.3%
普通、特に はない	人数	6人	13人	79人	その他	人数	28人
	割合	24%	41%	70%		割合	23.1%

### 3-3 日本画教育の現状

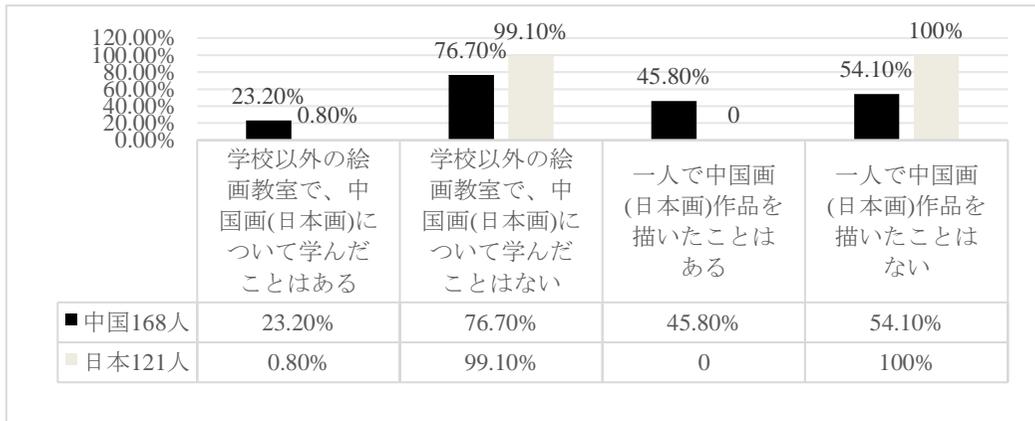
調査結果は表3に示した。日本画についての授業を受けたいかどうかという問に対して、日本画についての知識・関心を少しもつ児童のうち「受けたい」と回答した割合は61%、日本画に関する知識・関心を全くもたない児童のうち「受けたい」と回答した割合は31%である。つまり、日本画を少しだけ知っている児童の中では、日本画を勉強したい気持ちがある。日本画を知らない児童の中では、勉強したい意欲は低い。自由記述では以下のような回答が見られた。

「なんか面白そうなので、やってみたいです」「何でわざわざ日本画にするの？もっと他にいいのがあると思います」「受けてみたいけど、日本画がわからない」。

この結果は以下のようにまとめられる。児童は日本画を学びたい気持ちはある。日本画に触れる機会があれば、児童は学びたいと思うだろう。実際のところ、6年生の教科書では日本画に関する授業はあるが、その内容は日本画の概念が明確に提示されておらず、児童はそれを日本画と知らない可能性もある。児童には油絵や水彩のほうが人気がある。日本画の絵具もあまり見られず、あってもそれは高価である。制作過程も複雑である。このようなことが日本画に関する授業が少ない一因と推測される。

次に、日中の課外活動について調査結果を示す（図3）。

図 3. 中国と日本における課外活動の調査結果<sup>11)</sup>



児童が知識に触れるルートは、一般的には学校を通じる。中国の小学校では授業中に中国画の授業を行うため、児童は中国画に興味を持ち、課外でも勉強し、かつ一人で中国画の作品を完成することができる。一方、日本の小学校では日本画に関する教育が非常に少ないため、児童は伝統文化である日本画を知らない。知らないために興味を持つこともできず、さらに学ぶ意欲も持ちえない。日本の美術教育では伝統文化の教育が中国よりも少ないと思われる。

## 4 両国の美術教育

### 4-1 中国の美術教育の歴史

中国絵画は中国の伝統文化である。長期にわたる発展過程において、西洋文化の衝撃を受けて中国画の表現方法にも変化が生じたが、その主要な中国画の筆墨精神は一貫している。中国古代の宋、元、明、清の時代には画院という機関で美術を学び、その時代、中国画は絵画の主流として存在した。その後「五四運動の後、中国画の変革の思潮が湧き、徐悲鴻、林風眠、高剣父らは西洋絵画の中の技巧と手段を参考し、中国画に改良を試み、積極的な成果を得た」<sup>12)</sup>。

「新中国成立後、徐悲鴻を代表とする中国画革新派は、中国画の写実性を主張し、絵画芸術の社会性を強調した」<sup>13)</sup>。改革開放時期には西洋の現代文芸思潮が再び流入し、論争を引き起こした。「1985年、李小山は『中国美術報』で「中国画はもう終わりの時になった」を發表し、関心と論争を引き起こした。1992年、呉冠中は「週刊明報」で「筆墨はゼロです」を發表し、1997年には『中国文化報』がこの文章を轉載した。1998年には張仃が『中国画の限界を守る』という文章を發表し、国内芸術界の世紀を跨る論争が起こった。長引く論争の中で、中国画の創作は新しい変化が発生した」<sup>14)</sup>。中国画の歴史は西洋の影響を受けているが、中国画を完全に捨

てひたすら洋画を勉強するのではなく、西洋絵画の長所を吸収して中国画を改良して発展させてきた。

現在も美術教材では伝統文化が重視されている。房・王・尹は以下のように述べている。

2014年に教育部が発行した『中華優秀伝統文化教育指導綱要の完備』では、中華の優秀な伝統文化系統をカリキュラムと教材系統に組み入れることを指摘している。その中で重要な措置は、カリキュラムの構成、カリキュラム標準の改訂、教材の編集の中で内容を強化し、比重を増やし、資源を掘り出すことである。2017年、中共中央市庁舎、國務院市庁舎が発表した『中華優秀伝統文化伝承発展プロジェクトの実施に関する意見』によると、「幼児、小学校、中学校の教材に重点を置き、中華文化の課程と教材体系を構築する」ことは伝承内容の段階と教育転化を突出させたものである。伝統的な内容を習得する段階と具体的な教育方法を示し、更に高い習熟環境を整備したと指摘している。2021年、教育部が配布した『中華優秀伝統文化進中小学校課程教材指南』は価値志向、学生規律、学科特徴、設計配置などの角度から「文化教材」の基本原則を提案し、今までで最も具体的で、実例を示した指導要領である<sup>15)</sup>。

これらの文書によると、中国政府は本国の伝統文化の学習を重視しているため、小学校の教科書では中国画に関する学習内容が多い。以下で指摘されるように、中国画のアニメーションの事例も存在し、中国画を活用したアニメーションも児童に影響を与えている。周は以下のよう述べている。

上海美術映画制作所が制作し、近代中国画の大家である齊白石の水墨画を取材した『小さいオタマジャクシはお母さんを探す』は、世界初の水墨アニメーションである。中国画の巨匠である李可染が制作に参加したアニメーション『牧童』、同じく中国画の巨匠・吳山明と卓鶴君が制作に参加したアニメーション『山水情』などである<sup>16)</sup>。

また、児童にとって趣味は大切である。教科書と授業から得る知識だけでは、児童は中国画に興味を持たない可能性がある。しかし、アニメーションの存在は児童の中国画に対する理解を深める。刘璟涵によれば、

美術学科の中で、中国画の美は中国画の美学価値を提示するだけでなく、美術学科の独特な味わいも提示する。小中学校の美術教師は教育の中で中国画の教育を重視し、中国画の美学価値を伝えようとし、児童に学習の中で中国画特有の魅力を感じさせ、中国伝統芸術の伝承を励まし、美術を愛し中国伝統文化を愛するよう指導する<sup>17)</sup>。

以上の分析から、小学校の美術教育において、教師は児童の中国画に対する学習と伝承を重視している。中国画は古代から現在まで中国の伝統文化として重要である。実際に中国政府からは伝統文化に関する多くの文書が出されており、教師は中国画教育を重視しており、児童に良い指導的役割を果たしている。そして、中国画に関するアニメーションが存在することから、児童は遊びを通じて中国画に触れることができる。このような背景が、中国の児童が中国画を学ぶことに対する意識が比較的高い原因であると推測される。

#### 4-2 日本の美術教育の歴史

日本の一般的な美術教育は明治期に始まる。その中心人物はアーネスト・フランシスコ・フェノロサ (Ernest Francisco Fenollosa) (1853～1908) と岡倉天心 (1863～1913) である。フェノロサは日本美術の保存を重視し、西洋画の排斥を主張した。岡倉天心は明治 17 年文部省の図画教育調査会の委員になり、毛筆画の採用を主張した。また、足立は以下のように述べている。

教科書については、1871 年の『西画指南』で鉛筆を用い、お手本を模写するという臨画教育が行われていたとされている。その後、『図法階梯』や『小学画学書』等、表現対象が細分化されたが、基本的には西洋画法の習得に特化するものであった。一方で、先に触れた国粹主義の運動が盛んになった時期の 1888 年には『小学毛筆画帖』という毛筆画の教科書が発刊されている。これがいわゆる『鉛筆画・毛筆画論争』である<sup>18)</sup>。

明治 40 年の小学校令改正において、『鉛筆画帖』と『毛筆画帖』は『新定画帖』となった。福田・福本・茂木は「『新定画帖』の最大の特徴は、従来の臨画一辺倒の図画教育から脱却し、児童の精神的発達を考慮した教材組織を提示し、それに基づいた指導体系の確立を図った点にある」<sup>19)</sup>と説明する。当時、『新定画帖』では鉛筆画と毛筆画という道具の区別が廃止された。また、足立は「『鉛筆画・毛筆画論争』についてふれ、学校教育において「毛筆画」の技術は教えられたが、幅広い意味での日本の伝統文化ということについては全くといってよいほど扱われていない」<sup>20)</sup>と述べる。

その後、戦後の昭和 22 年度版の学習指導要領図画工作編 (試案) には、小学校第 3 学年から鑑賞の内容に関する記述がある。隅によると、その対象作品は「(一) 指導目標 1. 日常使っている工芸品の美しさを味わわせ、その価値について関心を持たせる。2. 美術工芸品・絵画その他の美術品の美しさを味わわせる」と記されていることから、小学校の段階から、日本国内の美術作品及び工芸品にまで暗に触れることを求めている記述が見られる」<sup>21)</sup>と記述されている。そして、隅は、「昭和 33 年の小学校の学習指導要領では、例えば第 6 学年の内容に「ア鑑賞する作品は、児童の作品および児童に分かりやすい絵画、彫刻、建築、工芸品などとする。

またその地方にある芸術作品にも注意する」とあるように、特に「日本美術」を鑑賞の対象に活用するというを前提にしたはっきりした記述は見られない<sup>22)</sup>と分析している。さらに昭和 52 年度の小学校学習指導要領については、「目標においても内容においても、「日本美術」に関する記述は、前回同様一切ない<sup>23)</sup>と説明している。

また、隅は、「平成元年度版小学校の第 5 学年の内容に「ア我が国の親しみのある美術作品などのよさや美しさなどに関心をもって鑑賞すること」、第 6 学年の内容に「我が国及び諸外国の親しみのある美術作品などのよさや美しさなどに関心をもって鑑賞すること」という記述がなされることになり「日本美術」も扱うことが示されたことになる<sup>24)</sup>と評価した。

平成 10 年度版の小学校学習指導要領では、第 5 学年及び第 6 学年の内容は「B 鑑賞 (1) 作品などを鑑賞し、それらのよさや美しさに親しむようにする」の「イ 我が国や諸外国の親しみのある美術、暮らしの中の作品などのよさや美しさ表現の意図などに関心をもって鑑賞すること<sup>25)</sup>とあり、平成元年度版の内容と同じである。平成 20 年度版の小学校学習指導要領では、次のように記述されている。第 5 学年及び第 6 学年の内容の B 鑑賞において「ア 自分たちの作品、我が国や諸外国の親しみのある美術作品、暮らしの中の作品などを鑑賞して、よさや美しさを感じ取ること<sup>26)</sup>を学ぶ。

このように、時間の経過に伴い、美術の授業についての日本画の教育内容には大きな動きがあったことが分かる。一方、現代の日本画に対する意識については、永井の調査結果によると「高校生の 80.8%は美術の授業で日本画に関する表現活動の経験・記憶がない<sup>27)</sup>とされる。松下は次のように述べている。

高校の美術科専任教諭として就労した時期に度々聞いた話や質問がある。「日本画は花鳥風月だから難しいね」とか「日本画は工芸的でこれから消滅するの?」「絵を描くなら油絵でしょう」というまさしく『絵画=油絵(洋画)』の現代日本人の概念構造が完成されていたような時代でもあった。昭和時代の後半からしばらくの時代、日本画については「えっ、日本画って水墨のこと?」「見たことない、知らない、描いたことない」が普通であった<sup>28)</sup>。

以上、日本の美術教育は西洋文化の影響を受けており、伝統文化である日本画に対する児童の意識が十分とは言えないことが分かった。美術教育の分野で日本画に関する授業が足りないことは明白である。

## 5 小学校美術教育における日本画の確保

以上の分析から、美術教育における日本画の内容を高める必要があることを主張したい。永井（2020）も「日本画の特徴（特質）について認識を深めるための授業実践研究が必要である」<sup>29)</sup>と述べている。

現代社会は児童のみならず大人も含めて西洋の影響を受けている。このような中において、小学校の段階で日本画の授業を取り入れることは、児童にとってはある意味で新鮮な表現であると思われる。また、日本画についてよく知っているのは美術大学の学生や専門家が多いという現状がある。このままでは日本画を知っている人は減少するため、一般人にも日本画の知識を広めるべきである。日本画の認知度が上がれば、伝統文化である日本画の継承と創造への関心も高まる。さらに、日本文化に対する理解を促すことで、文化財保存の重要性を併せて理解できるようになる。

今後の小学校の美術教育において日本画の内容の導入するために考えられる提案を、以下に三点挙げる。

一点目は、教員養成課程において日本画を取り入れることである。日本の小学校では、図画工作で日本画に関する内容が少ないことと、授業で日本画を取り扱う機会が少ないことが分かった。教材については、昭和 22 年度版から平成 20 年度版の小学校学習指導要領の鑑賞の部分で、伝統文化である美術作品の鑑賞が指摘されている。鑑賞するのも大切だが、児童が実際に日本画の魅力を体験する必要もある。くわえて、大部分の現職教師は自身の小学校時代に日本画に触れたことはない。自分が教師になっても、日本画に関する基礎知識がないため、児童に教えるのは難しいと推測される。この問題を解決するためには、教員養成系の大学の美術教育科で日本画に接する機会を増やし、日本画に関する知識を身につけることが求められる。

二点目は、児童の意識を高める必要性である。小学校という義務教育の授業内で日本画を取り入れることは、迅速かつ平等に日本画を児童に理解させる方法の一つである。それは、経済水準に関わらず児童が学校に通うためである。課外活動や美術塾などはお金がかかり、個人の選択に依存するため、日本画に触れられる子は少数であろう。

三点目は、児童の日本画への興味を高める必要性である。アニメや漫画の発達により、児童は一般的にこのような娯楽を好んでいる。アンケート調査の結果からは、日本画を知っている児童は日本画を学びたがる傾向が見えた。そこで、日本画への興味を掻き立てることが重要である。しかし、興味を持っていないにもかかわらず日本画の勉強をさせられる場合、学習効果の低下が予測される。興味を持たせるためには、美術館で日本画の原画を鑑賞したり、筆や墨、岩絵具といったような日本画の材料で絵葉書を作ったりするなど、日本画に対する意識を高めながら興味を持たせることが必要であろう。くわえて、学校以外でも日本画に関する講座を行い、作品に触れるチャンスを増やし、美術の非専門家でも日本画に興味を持ってもらえるよう、様々な実践をすることが望ましいと考える。

## 終わりに

本稿では、小学校教育における中国画と日本画の内容を中心に分析し、中国の教科書では中国画について内容が多いのに対して日本の図画工作では日本画について内容が少ないことを明らかにした。これに伴い、中国の児童は中国画を学ぶ意識が高いが、日本の児童は日本画を学ぶ意識があまり高くないと考えられる。

児童への伝統文化教育推進の背景には、芸術家を育てることではなく、自国に対する愛着を育みたいという行政側の意識がある。中国では、2021年10月の教育部の通達により、2023年から高校入試に美術という科目が加わった。このことは教師、保護者、児童の三者に美術を学ぶ意識を高めさせた。国が伝統文化の教育観念を重視しているため、教科書の内容は中国画に関する知識も多い。日本では教師の自由度が高い。日本画を知らない教師が児童に日本画を教えることは難しいと思われる。児童の日本画を学ぶ意識を高めるのはまだ難しい状況である。伝統文化としての日本画を知っている人が少ないのは非常に惜しいことである。

今後、小学校の美術教育で日本画に関する内容を取り入れていくことが重要である。自身が実際に小学校の教育現場で日本画表現の指導を行い、児童の日本画学習の意識をどのように向上させるか、研究を進めていく。

## <注>

- 1) 中华人民共和国教育部（2022）『义务教育 艺术课程标准』本論文の中国文献の引用はすべて拙訳とする
- 2) 文部科学省（昭和二十二年法律第二十六号）は、施行日が令和5年4月1日で、令和四年法律第七十六号による改正として『学校教育法』が制定された。
- 3) 文部科学省（平成十八年法律第二十号）は、施行日が平成18年12月22日で、昭和二十二年法律第二十五号による改正として『教育基本法』が制定された。
- 4) 文部科学省（平成29年7月）『小学校学習指導要領』（平成29年告示）解説「図画工作編」
- 5) 左：人民教育出版社（2014）『美術六年级上册』,pp.20-21。右：日本文教（平成22年）『図画工作5・6下』,pp.20-21。また、原本はカラー版。
- 6) 左：人民教育出版社（2014）『美術六年级上册』,pp.20-21。右：日本文教（平成22年）『図画工作5・6下』,pp.20-21。（概要の部分と写真の分析が筆者の考察）
- 7) 左：人民教育出版社（2014）『美術六年级上册』,pp.36-37。右：日本文教（平成22年）『図画工作5・6下』,pp.36-37。また、原本はカラー版。
- 8) 左：人民教育出版社（2014）『美術六年级上册』, p.36,p.41。右：日本文教（平成22年）『図画工作5・6下』,pp.36-37。（概要の部分は筆者の考察）
- 9) 日本文教（平成22年）『図画工作5・6下』
- 10) 表3は著者作成

- 11) 図3は著者作成
- 12) 席卫权 (2019) 「中国画：继承中发展 坚守中创新」『河南日报第12面』
- 13) 同上
- 14) 同上
- 15) 房斐・王嘉宁・尹少淳 (2022) 「中华优秀传统文化进美术教材的评价指标构建与实证分析」『中国考试』12, p.55.
- 16) 周滕 (2021) 「传统绘画艺术还可以这么"潮"—小学中国画欣赏课的多元化解读」『中国中小学美术』000(007), p.50.
- 17) 刘璟涵 (2021) 「浅谈中国画在中小学美术教学中的美学价值」『美术教育研究』7, p.172.
- 18) 足立直之 (2023) 「明治期以降の日本の美術と美術教育のグローバル化に関する考察」『山口大学教育学部研究論叢』72, p.156.
- 19) 福田隆真・福本謹一・茂木一司 (1985) 『美術科教育の基礎知識』建帛社, p.22.
- 20) 前掲注18, p.158.
- 21) 隅敦 (2009) 「美術教育における"「日本美術」の位置"に関する考察」『富山大学人間発達科学部紀要』3(2), p.34.
- 22) 同上, p.35.
- 23) 同上, p.35.
- 24) 同上, p.35.
- 25) 文部科学省 (平成10年) 『小学校学習指導要領』
- 26) 文部科学省 (平成20・平成21) 『小学校学習指導要領』「図画工作編」
- 27) 永井学 (2020) 「中等教育及び高等教育における絵画指導についての一考察—日本画に対する学生の認識」『大分県立芸術文化短期大学研究紀要』58, p.19.
- 28) 松下明生 (2022) 「美術造形教育に於ける日本の伝統文化に関する研究—幼児造形・図画工作・美術等での日本文化の教育についての考察」『日本福祉大学子ども発達学論集』14, p.42.
- 29) 前掲注27, p.19.

主指導教員 (永吉秀司准教授)、副指導教員 (柳沼宏寿教授・橋本学教授)